
2018 ジョイントに参加して

宇都宮大学国際社会学科社会学科3年 神林 泰暢

今回のジョイント合宿は、共通会を実質ひとりで担当することとなり、時間のない中での準備となった。準備に関しては、お話を聞きに行った先で想定していた話が聞けなかったり、1人で準備をしているためにこれで良いのかと迷うことがあったりして、2年前に参加した時よりも辛さがあった。そんな中でもレジュメを書ききり、発表を完成させられたことはよかったのではないかなと思う。その結果として準グランプリを頂けたことは、自信につながった。一方で、グランプリをとれなかったことはとても悔しさが残る。調査・提案に関してもっと熟考できる部分はあったと感じているので、最後の詰め部分を今後のまちづくり提案や卒論でこだわっていきたい。

宇都宮大学国際研究科1年 曹 倩倩

今回はジョイントの参加が第2回だが、昨年よりすごく緊張する。昨年は先輩の発表を応援するだけだが、今年は自分の番になって、自分が外国人として、発表したり、論議したり、不安を抱えながら、他のチームに負けないように頑張る。

今回の参加の大学と先生はあんまり変わらないから、一年ぶりに皆人と会って、何か懐かしいと感じる。これはジョイントが終わるに、先生が言ったように、一期一会の意味だ。皆人と結んで縁をこれからの生活と就活に活用できれば、今回のジョイントが有意義だと思う。

発表前に自己紹介の間に、ある学生は今回に皆人と気楽に話し、冗談しても大丈夫だよと言われた。その一瞬間に、私の緊張感がすぐなくなった。そう考えたら、次回にこの方法を活用できるかもしれない。

10月から12月まで、ジョイントの準備時間が短い時間だが、なんとなく、無事に発表が終わった、すごく勉強になった。今回の経験を自分の宝物として、これから活用しようと思う。先生の研究室に入って、面白いジョイントに参加できることが幸いだと思う。

宇都宮大学国際研究科1年 王 衛澤

11月30日、館山市でジョイントに参加した。これも私初めてグループで発表することである。皆の発表を聞くと心から感動された。皆が社会を改善するという希望を感じた。特に夜に法制大学の二人と相談したということから見ると、彼たちが自分の考えたいものがある、防災と持続可能発展についてを良く聞いた、昔に知らなかったことを了解し、新たな構想を生まれた。

宇都宮大学国際研究科1年 鄭 斯琦

今回は参加者として、ジョイントに参加しました。初めて代表者として、グループの責任を担った、経験しました。そして、論文を書く途中に、確かにいろいろな困難に会いました。例えば、アプリを導入する方法など、どうすれば進んでいますか？

でも、結局に乗り越えた、無事に完成しました。貴重な経験いただきました。そして、六つの大

学の学生と一緒に住んで、コミュニティーして、楽しかったと思います。他大学の学生が発表する時、その考え方、発表の方式なども自分を啓発しました。そして、一番うれしかったのは、全員 bingo しました！ すごく、運をかけると思います。

宇都宮大学行政学研究室指導教授 中村 祐司
—少数精鋭の強み—

ゼミ指導における新学部と国際学部との狭間の年ということもあって、今回のジョイントゼミでは、宇大からの参加者は国際学部生 1 名、留学生院生 3 名と、少ない参加人数となった。

それでも敢えて自由論題 1 本、共通論題 1 本に挑み、前者においては留学生が、後者においては学部生が、各々渾身のレジメ(論文)とパワポファイルを作成し、各々がぎりぎりまで準備をして、いずれも快心に近い報告と応答を行った。努力は裏切らない。留学生の問題意識の向上や日本語コミュニケーション能力の向上、学部生による課題を感知するアンテナの鋭さ、論理展開の滑らかさ、わかりやすい説明が聞き手に与える説得力、などを目の当たりにした。まさに教員冥利に尽きる経験であった。

研究室として 20 数年にわたって参加し続けているジョイントの流れを断ち切ることなく、つなぐことができた喜びも大きい。同時に、大学教員にとって、教育活動はあくまでも相手(研究室メンバー)があって成り立つものだという当たり前のありがたさを、今回ほど身にしみて痛感したこととはなかった。参加人数の多寡は関係ないのだ。

研究室メンバーにとって、学生時代ならではの貴重な機会が得られたのも、今回の幹事校(四日市大学)、会場校(中央学院大学)、参加大学(法政大学、山梨県立大学)の学生や先生方の協力によるところが多く、改めて感謝申し上げたい。

今回は館山セミナーハウスにおける他の利用者数の都合により、初の 1 泊 2 日の合宿となった。本来であれば 2 日目に行われた懇親会が、翌日(2 日目)に共通論題を残した形で行われたため、やや解放感に浸りきれなかった点や、最大の楽しみともいえる教員間での語り合いが 1 日目の夜のみとなってしまった点、夜の移動となった帰路の緊張が増加した点など、日程短縮の影響は確かにあった。しかし、一方で、日程が圧縮したことで、かえってそれらを補って余りある濃密な 2 日間を経験することができたとも感じた。日程の短縮はジョイントの価値からすれば付随的なものに過ぎないのであろう。

キャンパスの外に出て、県外に出て、複数大学の教員と学生と一緒にあって、現場発の地域や政策の諸課題を共有し、異なる考えに接しながら、解決策を皆で必死に追求するジョイントは、非常に貴重な場である。しかも、学生だけでなく教員にとっても毎回何らかの新たな発見がある。だからジョイントはやめられない。

遅ればせながら、移動には初めてナビゲーションと ETC の備わっている車を利用した。驚いたのは、今や東京圏における高速道路では、ETC を利用しない「一般車」は少数扱いどころか、片身の狭い微少な存在となったことである。帰りによやく宇都宮市内に入って北関道を降りる際の料金所で、偶然、前の車 2 台が「一般車」のゲートに入るのを見た。宇都宮はまだまだ地方なのだと妙に納得してしまった。また、渋滞を把握し、状況に応じて最短時間を選択するナビの性能に、これまで勘や思い込みに頼り続けてきた身には、不安を感じつつも、感嘆せざるを得なかった。将来(未来?)的にはいったん車に乗りさえすれば、ずっと眠ったままでも目的地(館山セミナーハウス、宇都宮)まで移動できるようになるのだろう。